

9月26日から12月17日まで国立新美術館で開催の展覧会を観た。チケットを譲ってくれた友人、藤井君は「太陽が乏しい中欧で(駐在員として)過ごした者にとっては、ボナールの南欧の明るさとけだるさが大好きです」と言っている。僕がボナールの絵をパリのオルゼー美術館で多く見たが、じっくりと観たわけではなかった。今回は心行くまで観賞しようと思ひ出かけ、満足した。装飾的な作品に興味をひかれ、生涯一貫して描き続けた白と黄色の陽光、それに逆光のような陰が印象に残った。画面上で、いくつかの色を特に強調して塗るのも特徴の一つと感じられた。

### 1. ボナールの位置づけ

絵を虚心坦懐に観るのが良く、「位置づけ」を先行させるのは邪道かもしれないが、このレポートを簡潔にする為と、「遅れてきた印象派」との世評が正しいかを検討する為に「位置づけ」を書く。彼は「色彩の魔術師」と呼ばれたが、マティスのフォービズムやピカソ、ブラックのキュビズムのような革新運動をしたわけではなく、24歳のとき、「私はどの流派にも属さない」と言っている。自由な発想をもった独立性が生涯つらぬかれている。ただマティスは彼を評価し、友人であった。

### 2. ナビ派

派閥には属さないとは言っても、若い頃はナビ(ヘブライ語で予言者)派の創始者の一人であった。ナビ派は「写実主義」に反対し、ゴッコンの大胆な色彩の使用に影響された。また自然の光を画面上にとらえようとした印象派に反対し、画面それ自体の秩序を追求した。ボナール自身いわく、「絵画とは小さな嘘をいくつも重ねて真実を作ることである。」平面における線の重視と、空白部分利用の画面構成は浮世絵版画の影響である。

### 3. ジャポニスム

『黄昏(クロッキー)の試合』1892年(Fig 1)の平面的人物像、枠からのぞき込む画面構成に浮世絵の影響を見て取れる。屏風を思わせる『庭の女性たち』1890-91年(Fig 2)は屏風を思わせ、「見返り美人」の姿勢を浮世絵から学んでいると思われる。『乳母たちの散歩、辻馬車の列』1897年(Fig 3)も屏風風だが、何と云っても「空間」利用が大胆だ。



Fig 1

Fig 2

Fig 3

ボナールは「ナビ・ジャポナール japonard」と渾名をつけられたそうだが、『砂遊びをする子供』1894 (Fig4)に至っては、題材の子供まで日本人のようだ。

#### 4. ナビ派時代のグラフィック・アート

賞金を稼いで画家になるきっかけとなったリトグラフのポスター『フランス・シャンパーニュ』1891 (Fig 5) の黒い縁取りは、世紀末のアール・ヌーヴォのミュシャによるポスターを想起させる。泡の描き方に日本の影響が感じられる。この絵に感銘を受けたロートレックは、ボナールの手引きでポスターの傑作を作り始めたという。やはりリトグラフの雑誌用ポスター『ラ・ルヴュ・ブランシュ』1894 (Fig 6) のデフォルマシオンと意表を突く構図も浮世絵から学んだものかもしれない。

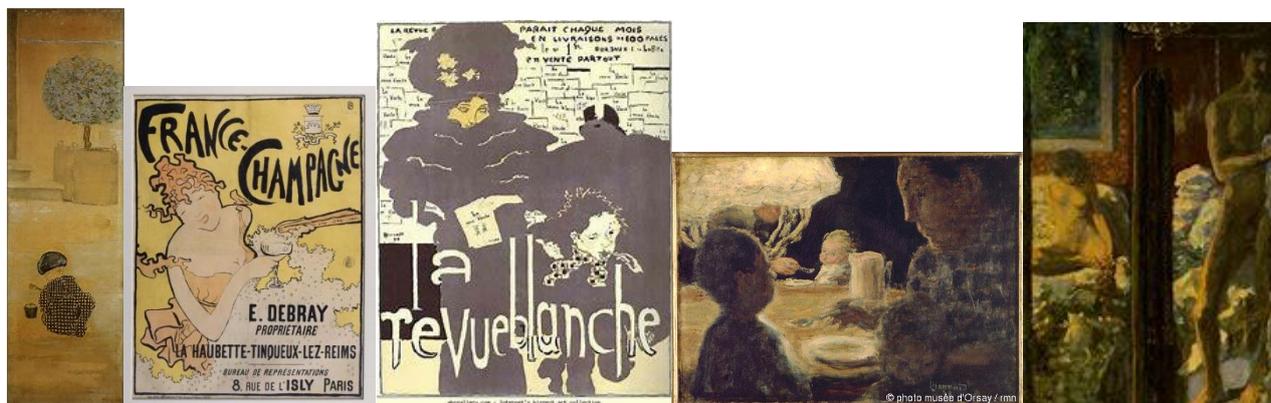


Fig 4

Fig 5

Fig 6

Fig 7

Fig 8

#### 5. 光と影

光と黒い影のコントラストを効かせた絵も多い。『ランプの下の朝食』1899 (Fig 7) や、『ランプの下』1898 などだ。「暗示的演出を特徴とした象徴主義演劇を思わせる」との説明は、「象徴主義演劇」が何であるか知識のない僕には、よく理解できなかった。『男と女』1900 (Fig 8) は、ボナールがナビ派から脱却する契機となった作品と言われるが、ここでも左の明るい女と右の陰になった男が対称的である。

光については、黄色と白のまぶしい陽光が特徴的だ。『浴盤にしゃがむ裸婦』1918 (Fig 9) の画面左、『猫と女性 あるいは餌をねだる猫』1912 (Fig 10) の食卓がそうだ。『ル・カネの食堂』1932 (Fig 11) の食卓は、この写真では白っぽく見えるが、実物はもっと黄色い。なお Fig 9 のモデルは、その華奢な体形から、永年同棲し最後には結婚するマルトに違いない。また Fig 10 の女性は、結婚後のマルトとの説もある由。

#### 6. 茫洋さ

Fig 11 の女性の表情は猫の表情と比べてボーッとしている。Fig 11 の老婆も存在感がない。絵全体が茫洋としているという例はないのだが、登場人物の表情に自己主張がないのは特徴だ。裸婦像では、顔が見えない絵が多く、顔でモデルが特定できないことが多いという。『棧敷席』1908 (Fig 12) の右の女性の表情も観劇中にしてはぼんやりしている。



Fig 9

Fig 10

Fig 11

Fig 12

## 7. 親密さ

フランス語で *intimité*。その絵画形式を *intimisme* アンティミスムと言う。これが、どうもよく分からなかった。上記の『男と女』は、説明によると「中央に置かれたついでが親密さの中に不穏な空気を醸し出している」とあり、やはり前述の『ランプの下の昼食』も「親密さの漂う空間を表している」という。室内の静物画を指すこともあり、『ブルジョワ家庭の午後あるいはテラス一家』1900(Fig 13)の一家団欒も「親密さ」を表すという。いろいろ辞書で調べてみると、「アンティミスム：日常・家庭の生活を描いた20世紀初頭のフランスの、ヴェイヤール、ボナールなどの絵画形式」が、展覧会での「親密さ」の説明に一番合致する



Fig 13



Fig 14



Fig 15



Fig 16

## 7. 一瞬の記憶の再構築

展示会場の説明によれば、ボナールは、対象物を手早くスケッチするか、写真に撮り、アトリエでじっくりと、「見た瞬間に脳に刻まれた強烈なイメージ」をキャンバス上に再現しようとした、という。前述の Fig 9 の裸婦は10年前に撮った写真を基にしている。Fig 11 も老婆や猫より食卓と卓上の食器の方が、彼には印象が強かったのだろう。『大きな庭』1895(Fig 14)は一瞬、強烈に目をとらえた緑をグラデーションと共に画面いっぱいに塗っている。『南フランスの風景 ル・カネ』1928(Fig 15) は、丘を登りきったところで振り向いた瞬間の光景を描いている。鮮やかな色彩の瞬間的な印象という点で、僕が感動したのは、遺作『花咲くアーモンドの木』1946~47(Fig 16)。死の目前まで、甥に指示して筆を入れたという。「願はくは花の下にて春死なむ」という西行の歌を思い出した。アーモンドは桜の一種である。

【完】